乱歩と大東京

藤井淑禎

乱歩が関東大震災後の復興著しい東京を活写していたことについては、「大衆読者と『通俗長編』――〈あこがれ〉の関数としての通俗娯楽性」（『国文学解釈と鑑賞別冊・江戸川乱歩と大衆の20世紀』平成十六年）、「乱歩と京浜国道――大東京の時代と乱歩」（村田碧と共筆、『立教大学日本文学』九四、平成十七年）などで、すでに述べたことがある。

帝都の二大幹線道路とも言うべき昭和通りと大正通りとを作中にいち早く取り入れ、さらには当時「繁華を誇る日本一の京浜国道」（白石実三『武蔵野から大東京へ』昭和八年）とうたわれた京浜国道を舞台とするカーチェイス・シーンの創出など、乱歩の取り組みはきわめて意欲的だ。そればかりでなく、大衆読者のモダンへの憧れに応えた住居や調度品、衣服、暮らしぶり（「〈家族〉の出現――乱歩と明智の時代」『江戸川乱歩と大衆の二十世紀に関する総合的研究』報告書、平成十九年、をも参照）の精細な描写など、乱歩のサービス精神は徹底している。

そうした、関東大震災からの復興を高らかにうたいあげたのが、昭和五年三月二十四日から一週間にわたって市内各地でさまざまな行事が催された帝都復興祭であることは広く知られているが、昭和戦前期の東京を彩るもう一つの大きな行事が、昭和七年十月一日の大東京の誕生であった。言うまでもなく、それまでの十五区制から、隣接する五郡八十二町村を合併して三十五区制へと移行した「市域拡張」のことを指すが、この時拡張された市域がほぼそのまま現在の二十三区として戦後も継承されたことを考えると、大東京の誕生の意味はすこぶる重い。

いま、手元にある『市域拡張記念　大東京概観』（東京市役所編、昭和七年）と東京市役所によって配布されたと思われるミニ地図『市域拡張記念　東京市分区図』などによって、その拡張の規模をうかがうと、町数は一二〇〇から二三五〇に、小学校数は二〇四から四九七に、面積は二五二八万坪から一億六七一六万坪に、人口は二〇七万人から四九七万人にと、増加している。人口でそれまで日本一であった大阪市（二四五万人）を抜いたばかりでなく、世界でも、ニューヨーク（六九三万人）に次ぐ第二の都市となったのである。

＊

さて、ここからは徐々に本稿のテーマに近づいていこうと思うが、昭和四年に今和次郎が出版した有名な『新版大東京案内』に、旧十五区制時代に市域と郡域の境界上にたてられた境界標の写真が載っている。コラムのかたちで写真と短文とが載せられているので、その短文を紹介してみる。タイトルは「市郡　境界標と円タク」だ。

市内一円といふクルマに乗つてうつかりしてゐようものなら、「こゝは郡部になつてをりますから……」などと運転手及び助手君におどろかされることがある。ところ〴〵に写真のやうな境界標が立つてゐるが、大ていは規定外のスピードで駛つてゐる車上からそれを目捕すのも困難なわざである。だが最初から「××まで一円で」と切り出し、それで行かなきや止すがいゝのだ。あとから〳〵と幾らでも空車が来る。新宿駅は市内並になつてゐるが実は郡部で境界標は新三越建築場の前あたりに立つてゐる。

歴史的事実としては、既述のように昭和七年十月を期して三十五区制の大東京となったことは知られていても、旧市域と新市域との境界（それ以前であれば市と郡との境界）をめぐる当時の人々の意識については、かえりみられるこ

とが少ないのではないだろうか。そして、この暗黙のうちにあったであろう境界意識は、大なり小なり、実生活においても、また小説などの書かれたものにおいても、それらの基底部分に横たわっていたはずである。ちょうど、いま、東京から神奈川方面に向かう際、多摩川を越えるときに県境をぼんやり意識したりすることもあるように。

そもそも、十五区制から三十五区制への移行はよく知られていても、また、十五区制時代の区の名前として、四谷区、麻布区、芝区、小石川区、本所区などの名前は知られていても、現代のわれわれは、具体的にどの地域までが旧市域なのかまではわからない、というのが実情なのではないだろうか。もっとも、先のコラム「市郡　境界標と円タク」にも「新宿駅は市内並になつてゐるが実は郡部で」云々ともあったのだから、案外こうした、時として混乱してしまうことは、当時の人々の場合にもあったのかもしれないが。

そこで、手元にある『最新調査　大東京市郊外地図　番地入交通明細』（昭和四年）を使って、よく聞く地名が旧市域なのか新市域なのかを確かめてみることにしよう。タイトルからもわかるように、旧市域には冷淡で、近々新たに市域に編入される予定の地域には番地まで記入してあるこの地図には、欄外に、新たに市域に編入される予定の地名の主だったものが書き出されており、すこぶる便利である。

新か旧か紛らわしい地域に限ってあげてみると、まず西北部では、池袋、巣鴨、戸塚、大久保、落合、長崎などが新市域予定地区だ。同様に、西南部では、代々木、渋谷、原宿、千駄ヶ谷、淀橋、柏木など。南部では、品川、大崎、目黒など。東北部では、田端、日暮里、曳舟など。東南部では、亀戸、大島など、となる。

これとは逆に、旧市域の町名は、当時流布していた十五区制時代の地図の裏にたいてい印刷されていた「町名索引表」を見れば一目瞭然だが、試みに、やはり紛らわしいものだけを少しあげておくと、若松町、早稲田鶴巻町、戸山町は牛込区、三光町、花園町、内藤町は四谷区、青山南町、青山高樹町は赤坂区、高輪南町、白金台町は芝区、雑司ヶ谷町、関口台町、大塚上町は小石川区、駒込動坂町、駒込上富士前町は本郷区、などとなる。

言うまでもなく、旧市域と新市域のあいだに境界が、ひいては境界意識が存在するわけだが、一例をあげれば、四谷区内を四谷から新宿方向に向かって来ると、三光町を抜けた地点あたりが境界で、そこから右曲がりに角筈を抜け、鉄道のガード下をくぐれば淀橋町で、そこからは青梅街道

が一直線に続いている、といった具合だ。こうした境界、ないしは境界意識が旧市内を囲繞していたわけで、そうしたことを意識して作品を読むことも、大東京時代の文学の場合には必要だろう。

＊

ここで話を乱歩へ戻すと、帝都復興をあれほど積極的に作中に取り込んでいた乱歩であってみれば、当然、大東京の場合も似たようなことが予想されるだろう。――乱歩が創作上で、そして実生活上でも大東京を強く意識していた時期、それは、芝区車町に転居した昭和八年四月に始まり、新市域へと小説の舞台を拡げた「人間豹」の連載開始（『講談倶楽部』昭和九年一月）、新市域である豊島区西池袋への実生活上の転居（昭和九年七月）、を経て、「人間豹」の筆を擱く（昭和十年五月連載終了）までの期間であった、と、とりあえずは言ってよいだろう。

ところで「人間豹」にとりかかる直前まで、乱歩は二度目の休筆期（昭和七年三月～八年十月）をおくっていた。「平凡社の全集の印税で、当分生活には困らないので、自己嫌悪にたえぬ小説など一刻も早くやめたいという我儘から」（『探偵小説四十年』昭和三十六年）、と乱歩は記しているが、その間、八年四月には、下宿人争議以来無人のま

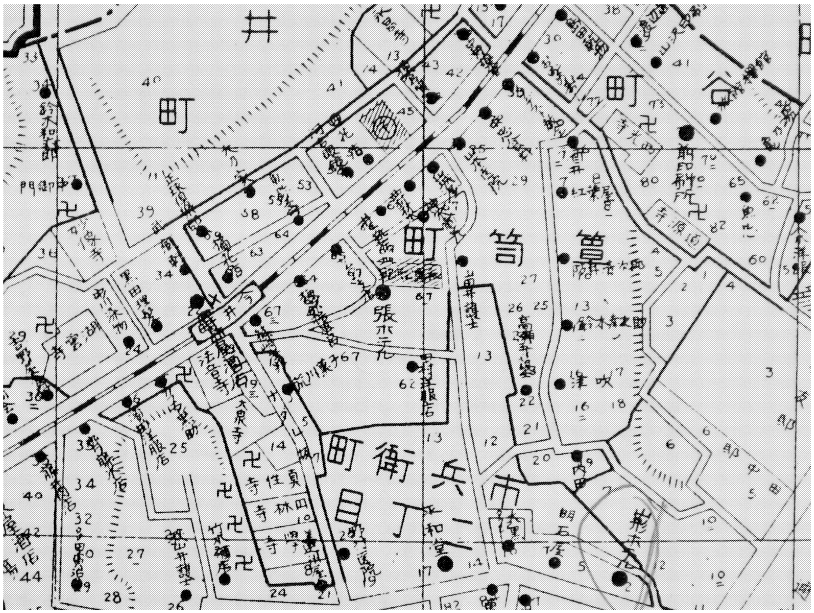
まで放置され、持て余していた下宿屋「緑館」（戸塚町）にようやく買い手がつき、芝区車町の土蔵付きの借家に転居することができた。二階の床を取り払って天井の高い洋室に改造されていた土蔵はことのほか乱歩の気に入り、最初は書棚やら大デスクやらを特注する力の入れようだった。

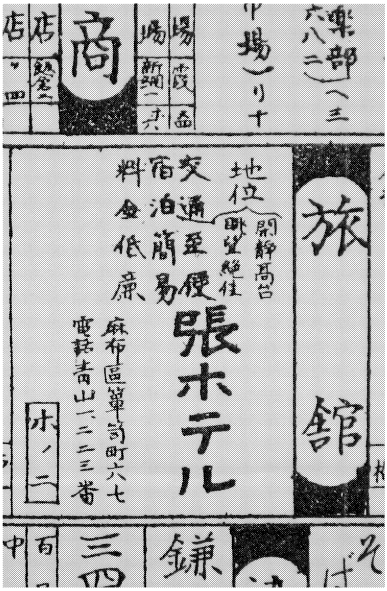
しかし、やがて乱歩はそこがとんでもない場所であったことに気付くことになる。家の十数メートル横には京浜国道が通り、車の騒音と排気ガスとに悩まされることになったのである。そればかりでなく、京浜国道には路面電車も通り、しかもその隣の海岸沿いには鉄道も走る、という騒々しさであった。「車町ノ家ヲ僅カ一年デ移ッタノハ、京浜国道ト東海道線（鉄道）ニ近ク、殊ニ二階ノ私ノ部屋ハ終日終夜轟々鳴リ響イテヰテ安眠出来ズ神経衰弱トナッタカラデアル」（『貼雑年譜』）。

当時の自動車の騒音や排気ガスのすごさを今想像するのは容易ではないが、地方在住の伯父が娘を連れて東京の新聞社勤めの甥を訪ねる様子を対話体でユーモラスに描いた「一九三〇年新風景　新東京見物」（小野賢一郎著、『講談倶楽部』昭和五年八月）には、伯父のこんな言葉が書きとめられている。――「ヤレヤレ、けふは随分歩いた。郊外まで帰るとどうやら落付くね、東京中のあの臭ひあの音はどうだ。ガラガラ、ピーピー、ブーブー、まだ耳に音がついて居てガーンとするね、それにあの空気の臭ひはどうぢや、東京の市中はガソリンとホコリの臭ひでカーツとしてしまふ。ガソリン臭い中を随分歩いたもんぢや」。乱歩の場合も終日終夜こんな環境だった、と想像すれば、実際の様子にかなり近づいたことになるだろうか。

結局、せっかく手を入れた立派な書斎もろくに使わずに、乱歩は車町の借家を逃げ出し、麻布の張ホテルという宿に長期滞在するようになる。「芝区車町の家の騒音（京浜国道に近く、汽車、電車、自動車、終夜轟々たり）を避け麻布区の『張ホテル』に長期滞在せるも、やはり何も書けず」（『探偵小説四十年』）。『探偵小説四十年』によれば、これは昭和九年一月のことのようだ。麻布と言うと今の感覚ではモダンな町と思われるかもしれないが、当時は自然が多く残った閑静で坂の多い、高台と谷の町だった。張ホテルがあったのは、今の六本木の交差点から六本木通りのなだらかな坂を下って少し北東に行き、元の今井町の市電停留所のあたりから斜め右方向にやや急な坂を登っていったところだった。

番地は箪笥町六七番地、当時の広告に「閑静高台、眺望絶佳」とあることからも、その住み心地のよさがうかがえ





よう。隣にはチェコ公使館（地図では秘露（ペルー）公使館となっているが、乱歩の時代にはチェコ公使館が移転してきていた）、向かいにはフィンランド公使館（地図には記載なし）があり、その異国情趣ぶりが張ホテルの「エキゾチックな感じ」（『探偵小説四十年』）とマッチしていた。すぐ近くには、永井荷風の偏奇館や荷風が好んで通った山形ホテルもあり、とにかく車町とは何から何まで正反対の別天地であったようである。この張ホテル滞在中の乱歩を主人公として書かれたのが久世光彦の小説『一九三四年冬——乱歩』（平成五年）である。

それはともかくとして、この車町から麻布への避難からも想像されるように、この時期、乱歩の中には、一種の郊外願望(大東京志向、新市域志向と言っても同じことだが)とでもいうべきものが芽生えつつあったのではないだろうか。そしてその願望なり志向は、作品の中と実生活においてと、ふたつの方向に結実することとなった。

「人間豹」の『講談倶楽部』への連載開始は昭和九年一月号(発売は十二月五日頃)からだから、その部分の執筆は前年の十一月頃だろうか。四月に車町に移転し、そのあまりの騒音のすごさに辟易したものの、張ホテルへの避難はまだ、という、ちょうどそんな時分である。実はこの一月号掲載部分で乱歩は、郊外=大東京の新市域、を登場させている。半人半獣の人間豹恩田とその父が(母である?豹も)住む古風な木造の西洋館のある場所が、荻窪と吉祥寺のあいだの、街道から遠く離れた薄暗い森の中という設定だったのである。

もっとも西洋館が出てくるのは二月号掲載部分であって、一月号は、京橋近くのカフェから人間豹の恩田を円タクでつけてきた神谷が、新宿を過ぎ、街道(今と同様、青梅街道だろう)を四、五十分走ったところで車を乗り捨て、しばらく尾行したあげくに、荒れ果てた草むらで四足の人間豹から一喝されるところで終っている。ここで興味深いのは、円タクで京橋からとばしてきて、新宿近辺、すなわち旧市内と旧郡部との境界を越えるあたりの描写である。そこは初出誌ではこのようになっている。

深夜の大道は、何の邪魔物もなく、尾行にはお誂へ向きであつた。二台の車は風を切つて矢の様に走つた。／新宿までは窓外の町並に見覚えがあつたが、それから先きは殆ど見当がつかなかつた。車は場末へ場末へと道を取つて、いつの間にか人家もまばらな田舎道へ這入つてゐたが、やがて四五十分も走つたと思ふ頃、やつと前の車が停車した。

境界とか、旧市域から新市域へ、とこそ書いてはないものの、『新版大東京案内』が指摘していたように境界が入り組んだ新宿近辺を通過するあたりの描写には、境界を通過するという意識が、たゆたっているように見える。

次は郊外そのものの描写を見てみよう。「その辺は田や畑はなく、一面に荒れ果てた叢になつてゐて、道らしい道もなく」とか、「都会の雑踏から遠く離れた武蔵野の深夜は、冥府の様に暗く静まり返つてゐた。音と云つては空吹

く風、光と云つては瞬く星の外にはなかつた」などと描写されているが、これを車町の借家の二階の、騒音が「終日終夜轟々ト鳴リ響」（「貼雑年譜」）く中で書いていたと思うと、やはり何かを想像したくなる。

郊外＝大東京志向という憶測のもとに、ここでは「人間豹」に登場してくる場所について見てみよう。このあと小説には、レビューを上演する大都劇場（浜町近くとあるので、日比谷あたりか）に始まって、浜町、築地、龍土町、芝浦、九段、そして浅草と出てくるが、昭和九年十一月号（発売は前月五日頃）掲載部分には、もう一度郊外が登場してくる。

麻布龍土町の明智探偵事務所の門前に横付けにされた自動車に明智夫人の文代が乗り込み、その車が郊外にまで遠征するのである。「車は意地悪くも、まるで態との様に、淋しい町淋しい町と選んで、しかも段段郊外の方へ出て行くではないか」。「もう旧市内を離れて、淋しい場末町だ。そのゴミゴミした町と町の間に、大きな森の様なものが見える。昔、その辺がまだ村であつた時分の鎮守の森が、そのままちやんと残つてゐるのだ」。ここでは、旧市域と旧郡部との境界を通過する意識が、「もう旧市内を離れて」とはっきり書きとめられている。「車が停つたのは、社殿の前の広つぱであつた。杉や檜の大樹がまはりを取囲んで、たゞさへ暗い暗夜の空を、一層覆ひ隠してゐる」。

車が停車したところで、車体の後部にしがみついていた人間豹が車の中の文代に襲いかかるが、文代と見えたのは蝋人形で、運転していたのは明智とわかり、結局人間豹は駆け付けた警察隊にこの時点では逮捕されてしまうのだが、ボクにはこうした話の展開や場所の必然性がよくわからない。何か、わざわざ郊外を登場させたようにも思える。

ところでこの時期、乱歩はいよいよ意を決して車町の騒音に別れを告げ、当時はれっきとした郊外であった西池袋に転居している。「二ヵ月間の借家探しの末に、見つけ出したのが、池袋の家である。昭和九年七月のことで、父は四十一歳になっていた」（平井隆太郎『乱歩の軌跡』二〇〇八年）。そこで前掲の十一月号掲載部分にある郊外だが、旧市内を抜けて少し行くと今の山手線を越えるから、西池袋も文代さんが襲われた場所の候補になりうる。その部分の執筆は九月頃だろうから、新居周辺の散歩の道すがら立ち寄った鎮守社をモデルとした可能性もある。

この時期、乱歩は作中に郊外や大東京の新市域を登場させていただけでなく、実生活においても、郊外志向を実現させていたというわけである。ここで見逃せないのが、乱

歩作品の主人公である明智小五郎の転居だ。以前は御茶ノ水の「開化アパート」に自宅兼事務所があったのが、この「人間豹」では前述のように、麻布龍土町に一戸を構えている。厳密に言えば、麻布龍土町の明智の家が登場するのは、昭和九年十月号(九月発売。七、八月執筆?)からである。そうだとすれば、昭和九年七月という乱歩本人の転居とほとんど時を同じくして、明智もまた郊外へと転居していたことになる。

明智の新居は乱歩のように大東京の新市域ではなかったが、麻布に限って言えば、張ホテルを紹介した際に見たように、そこは郊外に勝るとも劣らぬ別天地だった。車町の煤煙と騒音に辟易して張ホテルに避難した乱歩が見つけた「郊外」が、明智の新居の地として選ばれたことはまちがいない。麻布龍土町は今の六本木交差点を円の中心とすると、北東方向の張ホテルに対して北西方向という違いこそあるものの、距離的にはほぼ同一円周上にあり、歩兵第一、第三連隊の広い敷地に囲まれた、これまた一級の郊外だった。作中の舞台から始まって、自らの住む場所も、さらには主人公の住む場所までもが、この時期、郊外志向一色に染め上げられていたのである。

さて、「人間豹」には最後にもう一度、郊外=新市域が登場してくる(昭和一〇年四月号)。言うまでもなく、熊のぬいぐるみを着せられた文代さんが、浅草花屋敷から盗まれた豹を虎柄に染めた猛獣と格闘させられるZ曲馬団の公演地M町(初出誌にはK町と書かれている個所もある)である。「東京市民生活の触手が、田園農民生活の中へと突入し、市民と農民とそれから小工場労働者とが渦を巻いて入れ混つてゐるやうな、大東京西南の一隅M町の、ほこりつぽい古道具市で有名な広場に、一ケ月程もうち続けてゐる大サーカスがあつた。その名はZ曲馬団」。

初出誌にはM町とK町とが混在しているが、「大東京西南」であることには変わりはない。困るのは、ここが浅草から車で五分ないしは十分で行ける、と書いてあることだ。浅草から西南方向に、しかも何十台連結の貨物列車の通る踏切を越えて、というからには、どうしても旧市内を抜け、今の山手線を越えて世田谷・目黒方面となるのだが、それにしても十分というのは無理がある。作中には芝浦・麻布間が二十分、警視庁・麻布間が十分と、他方では妥当な数値が書き込まれているのに、である。ちなみに「黄金仮面」には時速五、六〇マイル(時速一〇〇キロ近い)で飛ばす例があるが、これは高速走行専門の京浜国道の場合だ。

ここでもう一つ注目しておきたいのは、「K町の三ツ股

だ。料金はいくらでも出す。五分間に飛ばしてくれ給へ」と強引に命じる明智に対して、運転手が「だつて、市内ではいくら飛ばさうたつて、先が閊へてまさあ」と答えていることである。市内と郡部との境界が意識されていることを示すと同時に、ある意味では当然かもしれないが、大東京施行後数年を経ているにもかかわらず、市内と言えば旧市内、という感覚が依然として健在であったことを雄弁に物語っている。

光文社文庫版「人間豹」の註釈で平山雄一はM町を目黒不動かと推測しているが、ボクの想像する世田谷上町のボロ市(K町のほうの記述に基づく。その場合円タクの走る「坦々たる一直線の大道路」は今の玉川通りだが、残念ながら渋谷駅の横はすでに高架になっていて踏切を通過する必要はなかった)ともども、やはり無理がある。方向か所要時間か、どちらかに誤植があるのだろうか。あるいはこれこそ文字通りのミステリーか(?)

いずれにしても、これが「人間豹」に登場する三つ目の郊外=新市域だが、その背後には車町の騒音に参った乱歩の郊外志向があったのである。ともあれ、乱歩は(明智も)「人間豹」連載中に首尾よく郊外への脱出を果たした。「当時、空気のキレイなことでは東京随一といわれた池袋の土地柄が持病(鼻茸—藤井注)にも小康をもたらしたのかもしれない」(『乱歩の軌跡』)のであれば、めでたしめでたしというほかはない。

「池袋の現住居に移った当座しばらくは、特に機嫌のよい日が続き、私を相手に庭でキャッチボールに興じたことさえあった」(平井隆太郎『うつし世の乱歩』二〇〇六年)。郊外志向をもう一段大げさに言えば、自然や野生への志向であり、だとすれば「人間豹」の猛獣自体が、乱歩の車町の騒音に辟易する気持ちの産物でもあったのかもしれないのだ。こんな風に見てくれれば、車町の悪環境こそは、創作と実生活両面での乱歩の郊外=大東京志向の産みの親であった、と言うこともできるはずである。